良寛

池松　孝子

大寒に入ると、毎年、母は「大寒についた餅は黴(かび)がこないから」と寒餅と一緒に良寛ゆかりの「手まり饅頭」を送ってくれた。岡山倉敷の薯蕷(じょうよ)饅頭である。薯蕷粉と米粉、つくね芋を練り合わせ蒸しあげた饅頭で、ふっくらとやさしい故郷の味、懐かし味だ。今でも帰省すると必ず求める。形も良寛が子供と遊んだという手鞠に見立てたもので、修行した円通寺には「霧立つ長き春日を　子供らと手毬つきつつこの日暮らしつ」という手鞠の歌碑と銅像が建っている。

良寛は江戸後期、宝暦八年、越後出雲崎の名主の家に生まれた。出雲崎は日本海を隔て佐渡島を望み、幕府直轄の天領だった。佐渡金山で採取された金の陸揚げ港で、北前船の寄港地としても栄えた地だ。良寛は一八歳で隣町の光照寺で出家する。そこで生涯の師となる備中国玉島の曹洞宗円通寺の大忍(だいにん)国仙和尚に出会う。

二十二歳から円通寺に赴き、厳しい修行に励んだ。円通寺は曹洞宗の格式の高い修行が行われたことで知られる。「円通寺に来てより、幾春秋なるかを知らず　門前千家の邑(ゆう)　更に一人を知らず　衣垢つけば　手自ら洗い　食尽くれば　城門に出ず　曽(かつ)て高僧伝を読む　僧はよろしく清貧なるべし」と良寛は記している。

十二年の修行の後、国仙和尚は良寛に「好きなように旅をするがよい」と言い残して世を去った。その教えに従って円通寺を去り、諸国行脚の旅に出る。放浪の後、三十九歳で雪深い故郷に帰る。その後、生涯にわたって寺を持たず漂泊の人生であった。

次の良寛の詠んだ歌は無欲恬淡な良寛の人生観そのものだ。

形見とて何残すらむ春は花　夏ほととぎす秋はもみじ葉

こと足らぬ身とは思はじ柴の戸に　月もありけり花もありけり

久松潜一氏は「和歌史における三大歌人」としてまずは、柿本人麻呂、次に藤原定家、そして良寛を挙げている。良寛は感情は和歌で、思想は漢詩で表現したと言われる。それはまさに詩歌の成り立ち、歴史を言い得たものだ。